

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

1960年代の日本映画に描かれたマレーシア・シンガポール

松岡昌和 (大月短期大学助教)

新型コロナウイルス感染症の広がりによって、国境を越えた往来が厳しく制限される中、映画の中の世界は、異文化を疑似体験できる場の1つとなっていると言えよう。近年の日本でもマレーシアやシンガポールを取り上げた作品が制作されており、それらを鑑賞することで、疑似的にマレーシアやシンガポールを訪問することができる。

特に娯楽作品では、マレーシアやシンガポールの各都市やリゾート地、あるいはフォトジェニックなスポットがふんだんに取り上げられている。映画で表現される外国は、その時々々の観客の欲望と切り離すことはできないだろう。

筆者はもともと日本占領期のシンガポールを研究対象としており、その延長で現在は戦争の記憶について関心を寄せている。そのような中、1960年代のマレーシアとシンガポールを舞台として、さらに戦争の記憶も盛り込まれた映画作品があると知り、調べ始めている。

その作品とは、市村泰一監督、橋幸夫主演の歌謡映画『シンガポールの夜は更けて』(67年、松竹)である。これは、独立(65年)直後のシンガポールと隣接するマレーシア・ジョホール州を舞台として、橋演じる主人公が犯罪組織に立ち向かう物語であり、さらに由美かおる演じる華人女性との恋愛模様も描かれる。

マレーシアとシンガポールにおける戦時期の日本占領から20年ほどたった60年代後半に、戦争の記憶がどのように語られ、両国が日本の視点でどのように描かれているのかについて、筆者は関心を持った。

そのタイトルにもあるように、物語はシンガポールを中心に展開され、所々に戦争の痕跡を見ることができる。

橋演じる主人公自身は、戦争を経験していない世代という設定であるが(橋自身、43年生まれである)父親が戦時期にシンガポールに渡って現地の華人女性との間に娘をもうけており、そのまだ見ぬ妹が失踪したとの知らせを聞いて、シンガポールに渡る。主人公はシンガポールで妹の手掛かりを求め、そこで戦争の経験が障壁となる。戦争によってあらゆる記録が消えてしまい、妹の手掛かりはなかなかつかめない。

その後、ふとしたことをきっかけに主人公はジョホール州に妹の手掛かりがあると知り、現地に向かう。そこでも現地の戦争経験に直面する。妹の生家を探し

てマレー人の村落を訪問した主人公だったが、そこで日本人の姿を見たマレー系の女性が激しいけんまくで主人公に怒りをぶつける。その女性は日本人の手によって両親を失ったという。主人公は行く先々で日本占領の記憶や戦争の傷跡に直面する。

それに対する主人公の反応は驚くほどあっさりしたものである。マレー系女性になじられても、ひどく困惑することもなく、また怒りや悲しみを浮かべることもない。「ここにはああいう人もいっぱいいるんだろうな」とつぶやくだけで、反論もしなければ、戦争加害の責任を考えることもない。

それは、シンガポールで失踪中の妹についての記録が戦争によって消失してしまっている事実を前にしても同じである。橋演じる主人公は、たとえ戦争の経験や傷跡を眼前に突きつけられても、どこか人ごととしてとらえているようである。

劇中、戦争の傷跡や日本占領の記憶は、その多くがシンガポールやマレーシアのこととして語られる。戦争終結から20年以上が経過し、日本が冷戦体制の下で急速な経済発展を遂げていく一方で、シンガポールやマレーシアは政治的にも十分に安定しているとはいえず、戦争の傷は戦後の政治的不安定さの中で残り続けてきたと言えよう。

映画の中で、シンガポールやマレーシアは南国のエキゾチックな場所として描かれただけでなく、戦争の傷跡をいまだに抱える「他者」として表現されている。これもまた、この時代に日本が東南アジアの国に求めたイメージなのであろう。

< 筆者紹介 >

1979年埼玉県生まれ。一橋大学大学院言語社会研究科単位修得退学。博士(学術)。専門は日本占領下のシンガポールおよび戦争の記憶。近年では世界史教育についても関心を持っている。主な業績として、Japanese language and soft power in Asia (Palgrave Macmillan, 2017年)(分担執筆)、『歴史学者と読む高校世界史：教科書執筆の舞台裏』(勁草書房、2018年)(分担執筆)ほか。